ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

夏の合宿から、一年が経つ。

正確には、明日で一年だ。

人やポケモンは、今日も夏の日差しに照らされて、道を歩いている。あるいは家の中で涼んでいる人やポケモンもいるだろう。海に遊びに行っている人達もいるかもしれないし、折角の夏休みなので、旅行に出かけることもあるだろう。

当然、山の中を歩いている人達もいるはずだ。現に、今、小学生が山道を歩いている。ややウェーブのかかった黒髪の、どこにでもいるような男の子だ。その後ろには、八匹のポケモンが、きちんと列をなして進行していた。まるで軍隊の行進ようにも見えるが、彼等は決して、そんなものを意識している訳では無い。ただ自然と、このようになってしまっただけだ。

彼は雅也。一之上学校に通う、小学二年生である。後ろに続くのは、彼のポケモン達。前から順番に、カビゴン、フシギソウ、カメール、ハピナス、フーディン、リザード、ルカリオ、ピカチュウだ。巨体のカビゴンが前にいるのは、この子を後ろにすると、置いてきぼりになってしまう危険性を考えてのことである。ただお陰で、後ろにいる他のポケモン達は、前が見えずに少しフラストレーションが溜まっているのだが。まあ、こうすることの理解はしているので文句は言えない。

彼等は今、とある場所に向かっていた。あの出来事から一年が経ったので、報告とかそんなところだ。

それから少し歩いて、雅也達はそこにたどり着いた。ここは洞穴。

六塚が埋められている場所である。

つまり彼等は、平たく言えばお墓参りに来たのだ。墓石も何も無い、ただの地面ではあるが、確かにここには六塚が埋まっている。

彼等はそこに向けて静かに手を合わせ、目を閉じてお参りをする。手を合わせながら、この一年で何があったのか、どんなことをしたのか、そして……これからどうするのか。彼等はそれを頭の中で思い浮かべていた。

合宿の後は、中々に平和な日々が続いていた。『いた』と過去形なのは、冬に一つ、かなりヤバ目な事件があったからである。と言っても、皆の頑張りで、どうにかなったのだが。

特筆すべきはそれくらいだろう。後は先日、とある人物から、とある誘いを受けたために、明日から皆と少し道場を離れることくらいだ。

他にも学校で何があっただの、こんな修行をしただの、そんな取り留めも無いことを色々と話して、雅也達はゆっくりと目を開けた。

「じゃあ、六塚さん。行ってきます」

　それだけ呟いて、雅也は洞穴から外に出た。その後から、ピカチュウ達も出てくる。カビゴンやハピナス、フーディンはまだ暫くお参りをしているが、きっと彼等にも色々と話す事があるのだろう。

　穴の近くで、雅也は日差しを受けながら大きく伸びをする。山道は木陰に覆われていたので、あまり汗はかいていないものの、やはり夏。ちょっと日を浴びただけで、額や背中から、じんわりと汗がにじみ出てきた。

　やがて、カビゴン達もお参りを終えたのか、洞穴から出てくる。全員揃っているのを確認して、雅也達は再び歩き出した。だが、向かう先は山の麓では無い。頂上だ。

　流石に頂上に向かうにつれ、木陰の面積も減っていく。さんさんと照らす太陽に恨みがましい目を向けながら、汗だくになった雅也達は、ようやくたどり着いた。ここは、ただの頂上では無い。

　ここは……この場所は、雅也がジャックと初めて出会った場所だ。

「……最後にここに来てから、結構経つね。どれくらいだろう？」

(だいたい二年と、半年くらいじゃないか？)

　雅也のふと発した疑問に、ルカリオが答えた。ゆっくりと、頂上のとある場所まで歩きながら、雅也は、もうそんなに経ったのか、と思っていた。

「……ここから、全て始まったんだ」

　そこに立つと、雅也はそう呟く。

彼が今立っているそこは、ジャックから突き落とされた場所。

そこで雅也はフーディンをボールに戻し、そのモンスターボールを腰のホルダーにセットした。そして崖から見下ろすと、遠くの方に街が見える。この風景を、雅也は暫くボーッと眺めていた。

ここからジャックのガブリアスに落とされたことが、彼とジャックとの因縁の始まりだ。

だから、今、はここで宣言する。

「ジャック」

　だが、そう呟いたその場所には、既に雅也はいなかった。

「いつか必ず……君を倒す！」

　先程まで雅也の代わりに立っていた場所には、おおよそこの世に生を受けるか疑問に思わざるを得ない人物がいた。

　背丈は、雅也と全く同じ。大きくパッチリとした黒い目には、子供らしい元気の良さが現れている。整った顔は、幼くも凛々しく、不敵な笑みを浮かべている。

　何より、一番目立つのは髪だろう。

　毛先は地面すれすれまで伸びており、真紅色に染まっていた。艶やかなその髪は、量が多いにも関わらず、まるで羽のように軽そうだ。頭のてっぺんだけはちょっと跳ねており、小刻みにピョコピョコと振動していて、どうもアホ毛とはちょっと違うようだった。

(なあ、雅也――)

「じゃなくて？」

(え……っと、そうだな。なあ、そろそろ帰らないと、師匠との練習試合に遅れるんじゃないか？)

　非常に微妙な顔で、ルカリオは雅也……では無いらしい人物に声をかける。

(聞いているか？……ロラン)

「……ん？　ああ。大丈夫だ。ちょっと考え事をしていただけだよ。聞こえてるって」

　ロランと呼ばれたその少年は、ルカリオの問いに頷いた。

「それじゃあ――」

　そして、ロランは皆の方に振り返る。夏の日差しを受けて、赤い髪の毛が煌きながら宙を舞った。ぶわっと広がったその髪は、『ロラン』というその存在を、目一杯に主張しているだろう。

　そしてロランは口を開く。

「いくよ、皆！」